

# TAIWAN BOOKS

2020

台灣好書 vol.1

cover illustration by 高妍 Gao Yan



発行：台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

日本語で読める台湾の本  
おすすめ18冊を紹介

take free

ごあいさつ

あなたは、台湾の著者が書いた本を読んだことがありますか？ あなたが日々の中で笑ったり、泣いたり、喜んだり、怒ったりするのと同じように、台湾の本の中には、それぞれの特別な一日、またはふつうの一日を過ごす台湾の人びとが描かれています。あるいは本の中に、あなたが旅行に行ったときに気づかなかった、台湾のローカルな素顔が見られるかもしれません。

「TAIWAN BOOKS 台湾好書」をお届けします。

日本語でいますぐ読める、またはもうすぐ読めるようになる本の中から、おすすめの作品を選びました。どの作品から読んでも、きっと台湾のことをもっと知りたくなるに違いありません。

2020年11月

台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

TAIWAN BOOKS

台湾の本の扉が開く……

好書

食、旅行先、映画などではもうおなじみの台湾  
実は世界でも有数の出版大国です  
台湾の出版のトレンドはどうなっているのか  
同時代の作家はどんな作品を書いているのか  
扉を開いてみてください

台湾

## 本から見える台湾のいま

張維中

台湾の出版界は活気に満ちあふれている。多様性を包みこむ自由な環境が、創作者の想像力と思考力を刺激し、華語文化圏で最も活き活きとした出版の聖地を育んだ。

近年、台湾で出版される本は、専門的なジャンルに「細分化」している。明確なテーマで、作者の専門的な知識や特殊な経験を書いた作品が増え、これまでマイナーと思われてきた題材の本も、いまはどんどん出版されている。

若い読者の支持を得ているのが、ヒューマンイズムの視点から、独特なライフスタイルを描いた作品、あるいは社会現象を掘り下げた作品だ。ネットストーリーの台頭で、出版社は小説を刊行する際、映像化される可能性も視野に入れて検討するようになった。ジェンダーも不動の地位を築いた分野のひとつ。女性作家が男性中心主義を批判して性被害を告発したり、インフルエンサーが過去に校内で受けたセクハラを訴えたり、「同志(性的マイノリティ)」作家がLGBTQの心の声を書いたりして、話題となった作品も多い。年老いた両親の世話を通して老いと向き

合った本も、この2年ほどよく売れている。作者の経験と学びは、同じ境遇に置かれた読者の慰めであると同時に、若者にとってはこれからの人生を考えさせるものでもある。絵本もまた百花繚乱だ。子どもはもちろん、大人までもがとりこになっている。

純文学を対象とした文学賞の意義が徐々に薄れていき、代わりにSNSから火がついた作品が文壇に躍り出た。スマホを使つての読書では、文字数の多い作品より、ライトで短い抒情詩に人気が集まる。若者がSNSで拡散するだけでなく、手で書き写したものをアップするブームまで巻き起こり、これがさらに作者の知名度を押し上げるようになった。

この小冊子に選ばれた本は、現代の台湾を代表するような作品ばかりだ。台湾の本当の姿を知りたいなら、本を開き、文字による台湾の旅へ出かけよう。それが一番の近道だ。



張維中

(ちょう・いちゅう / Zhang Wei Zhong)

台北生まれ。1997年に作家デビュー。小説、エッセイ、旅行記、児童書、絵本など作品は多岐にわたり、現在までに30点余りを出版。2008年来日し、東京を生活の拠点として創作を続けるかたわら、日本の最新情報を発信し、台湾の若者の支持を得ている。近作はエッセイ『東京直送』、小説『代替読再見』。



いますぐ読める 台湾の本  
おすすめの

9冊



日本でも台湾の本はたくさん出ています。  
その中から、いますぐ読んでほしい  
きっと面白い、おすすめの作品を  
ピックアップしました。

※作家名の読みの日本語表記は、日本語版書籍での表記に準じました。

單車失竊記 『自転車泥棒』



ごめいえき  
著 呉明益  
Wu Ming-yi

訳 天野健太郎

2018年  
文藝春秋  
2,100円＋税

いま台湾の若い読者に最も支持される作家、呉明益の長編小説。『歩道橋の魔術師』(2015年／白水社／訳 天野健太郎) に次ぐ2冊目の邦訳。父の失踪とともに行方不明となった自転車が、「ぼく」の目の前に現れたことから物語がはじまる。自転車の来歴を追ううちに、原住民族ツォウ族の青年が兵役中に体験した不思議な出来事、蝶の翅で工芸品をつくる女工、第二次世界大戦でマレー半島のジャングルで活躍した日本軍の「銀輪部隊」、そして、ビルマから中国軍とともに中国に渡り、戦後、国民党と一緒に台湾へ渡った象の「林旺」(リンワン) が記憶する戦争の苦しみなどを知ることになる。台湾の100年の歴史と庶民の記憶が、日本時代の台湾に根づいた自転車によって数珠つなぎとなり、大河のような壮大なスケールで描かれる。2018年国際ブッカー賞候補作。



## 冬將軍來的夏天『冬將軍が来た夏』



著 カン・ヤオミン  
甘耀明  
Kan Yao ming

訳 白水紀子

2018年  
白水社  
2,400円＋税

「私」は、大規模な幼稚園に勤める二十代の女性保育士。ある年の夏、音信不通だった祖母が、私に会いにやってきた。末期がんに冒された祖母は、小さなトランクに身体を折り曲げて入り、こっそり私の家に忍び込んでいたのだ。ちょうどその時、私は幼稚園の園長の息子にレイプされ、祖母は唯一の目撃者となる。私の心は傷つき、祖母が営む小型の共同ホーム——そこは廃棄され、水を抜かれた巨大なプール施設だが——の老女たち5人と老犬1匹と行動を共にするようになる。波乱に満ちた過去と強烈な個性をもつ老女たちのバイタリティーに影響されながら、祖母の終活に寄り添うなかで、私は自分の人生に立ち向かう力を得ていく……。台中を舞台に、スラップスティックなスピードで練り広げられる、世代を超えたシスターフッドの物語。女性総統も登場する。解説＝高樹のぶ子

## 暗礁『暗礁』



著 バタイ  
巴代  
Badai

訳 魚住悦子

2018年  
草風館  
2,800円＋税

1871年、台湾南部の東海岸で宮古島島民を乗せた船が座礁、食料を求めて森に分け入った漂着民66名は、“大耳人”と呼ばれる現地人の集落にたどり着く。集落の人びとは戸惑いながらも、困窮する宮古島民らに食料と寝る場所を提供する。その夜、宮古島民たちは「人を殺して食う」と言い伝えられる大耳人の行動に疑心暗鬼になり、こっそり集落から逃げ出すが、それは集落の人びとにとって最大級の侮辱であった……。物語はパイワン族（“大耳人”）の若者・アディボン、カルル、アルクと、宮古島民の青年・野原の視点から交互に語られる。著者は、のちの日本と台湾、琉球の運命を決定づけた「琉球人遭難事件」を基に、言葉や習俗の違いや未知のものへの怖れから起きた悲劇を描き、さらにそこにありえたかもしれない、人間と人間の魂が交流するドラマをも編み込んだ。

## 下一個天亮『次の夜明けに』



著 じょ・かたく  
徐嘉澤  
Hsu Chia-Tse

訳 三須祐介

2020年  
書肆侃侃房  
1,900円＋税

1947年、日本の植民地支配から解放されてまもない台湾。真実を伝える使命に燃える新聞記者の男は、ある日突然、ひと言もことばを発しない廃人になり果てた——。これはそんな男の妻、2人の息子と孫が、激動の戦後台湾社会を懸命に生きていく家族の物語だ。息子たちは抑圧的な政権に抵抗して公理と正義の追求者となった。孫は家族を顧みない父親の世代に反発し、歴史や政治に無関心を装うが、ゲイである自分と向き合い新たな一歩を踏み出していく。そして明かされる「男」の真実とは？ 1987年の戒厳令解除後、民主化の道程を歩んできた台湾の現代史をなぞりながら、新たな社会問題にも光をあてていく気鋭の新世代作家による台湾同時代文学。家族に悩み社会に怒りを持つ登場人物に、あなたは引き込まれるはず。そう、これはあなたじしんの物語でもあるのだから。

## 京都寂寞『いつもひとりだった、京都での日々』



著 ソン・シンイン  
宋欣穎  
Sung Hsin-Yin

訳 光吉さくら

2019年  
早川書房  
1,700円＋税

2019年11月に日本で公開された、台湾の長編アニメーション『幸福路のチー』の宋欣穎監督によるエッセイ集。2000年代半ばの2年間、京都大学大学院で映画理論を学ぶために滞在した京都で出会った人たちとの出来事を綴る。いつも寂しげな下宿先のアパートの大家さん、アルバイトをするカラオケボックスに毎週ひとりでやってくるおじいさん、真っ赤な口紅をさす喫茶「クンパルシート」のおばあさん、鹿王子と呼ばれる中国出身の留学生、そして同級生たち——。自身もひとり暮らしをする筆者の、どこか孤独の影を落とす彼らに向けたまなざしはやさしい。『幸福路のチー』での丁寧な人間描写と同じく、彼らはまるで短篇映画の主人公のように得も言われぬ魅力を放つ。そのみずみずしい筆致は素晴らしく、一篇一篇が短篇小説のようでもある。

## A 夢『Aな夢』



著 ジンシャンハイ  
鯨向海  
Jing Xiang-Hai

訳 及川茜

2018年  
思潮社  
2,300円＋税

精神科医でもある鯨向海の第五詩集『Aな夢』は、夜の闇の中からとろとろと朝方のシーツに流し出された純潔のような1冊。ドラえもん（哆啦A夢）を連想させるタイトル同様、どこまでも軽快な詩句は幾重もの含羞に覆われながら、取り戻せない過去への悼みを滲ませる。「幸福の感覚はすごく痛くて／ぼくは夢の中の果樹園で純真に膨張をつづける」(「果物」)、「どうしよう／ひとり孤独にドライマングーをひと袋食べつくしてしまった」(「いくらかは誰かにもう聞かれただろうけど」)。それは、固い鎧に身を覆ったような男性性に囲まれながらも、そこに融け込むことのできない悲哀だと見ることもできるだろう。鯨向海の詩が台湾の若い読者の心をつかむのは、親しみやすい言葉の選択に加え、溢れ出してはためらいがちに沁み入る液体のような優しさゆえかもしれない。

## 書店本事 在地圖上閃耀的閱讀星空 『書店本事 台湾書店主43のストーリー』



文 グオ・イー・チン  
郭怡青  
絵 ミス・シンディ  
欣蒂小姐

訳 小島あつ子  
黒木夏兒

2019年  
サウザンブックス社  
2,600円＋税

本と映像で“行っただけ”の台湾書店巡りを楽しめる1冊。日本と同じく読書離れや出版不況の続く台湾では、なぜか今、独立書店と呼ばれる個人経営の町の本屋が元気だ。離島を除く台湾全土に点在する店の中から、個性の光る43店をピックアップ。店主たちの生の声を丁寧に聴き取り、創業時期や業務形態をベースに「老舗の書店」「経験を積んだ書店」「新しい書店」「蔵書豊富な書店以外の店」の4つの章にまとめた。各店の基本情報ページに付されたQRコードを読み取ると、ネット上に公開されている店ごとのドキュメンタリー映像（日本語字幕）を見ることができる。本文と約3分間の映像とに収められた店主たちの生きざまや考え方を通して見えてくるのは、知られざる普段着の台湾と、そのなかに実体書店の存在意義を見出す彼らのしたたかで真摯な姿だ。



## 老屋顔『台湾レトロ建築案内』



著 老屋顔  
(辛永勝・楊朝景)

訳 西谷 格

2018年  
エクスナレッジ  
1,600円＋税

台湾各地に残るノスタルジックな建物を訪ね歩いたガイド。台北帝国大学の教授宅をリノベーションしたレストラン「青田七六」(台北)、ブックカフェに生まれ変わった大正時代の高級料亭「一二三亭」(高雄)、モザイクタイルの浴槽もかわいい「玉山旅社」(嘉義)、廃墟から華麗なる再生を遂げた「林百貨」(台南) など、紹介されている建物は、どれも実際に訪れることができる。そしてそのほとんどが、官公庁の威厳あふれる公共建築ではなく、市井の人びとが建て、暮らし、大切に受け継いできたものだ。背景にある物語を知れば、さらに味わいが増す。あわせて「鉄窓花」と呼ばれる飾り格子や、色とりどりのマジョリカタイル、人造石、赤レンガ、装飾ブロックといった鑑賞のポイントも紹介。ディテールにこめられた家主の思いまで見えてくる。

## 遙遠的冰果室『台湾レトロ氷菓店』



著 ハリー・チェン  
Hally Chen

訳 中村加代子

2019年  
グラフィック社  
1,700円＋税

氷菓店(冰果室)とは、かき氷やアイス、果物、飲み物、軽食などを出す店のこと。台湾の人にとっては、子どもの頃から親しんでいる身近な存在で、時にデートや見合いの場にもなった。供されるのは、炭火で8時間煮こむトッピングや手刀で切る団子、粉から手作りの揚げパンなど、どれも手間暇がかけられ、店主のこだわりがつまったものばかり。使われる道具もまたユニークだ。蒸気機関車のような存在感を放つ製氷機に、銅製のアイスクリームディッシャー、手描きの碗が、店の重ねてきた歳月を物語る。しかし時代の変化に抗い、看板を守り続けるのは大変だ。著者はこの台湾ならではの食文化を記録したいという強い思いで、時間と競争するように、各地の氷菓店を旅する。店の有り様に、人びとの生活や街の風景が映される。著者の撮り下ろした写真も秀逸。

## もうすぐ読める 台湾の本

### 注目の 9 冊



2021年も台湾の本の  
日本版がどんどん刊行されます。

台湾の“いま”がわかる  
台湾と日本のつながりがわかる  
旬の本を紹介します。

※各作品日本語版の刊行予定は、変更になる場合があります。

## 複眼人『複眼人』



著 吳明益  
Wu Ming-yi

訳 小栗山智

KADOKAWA  
2021年1月 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：新經典文化

太平洋に浮かぶ小さな島の掟に従い、ひとり草舟で大海原へ漕ぎだした少年アトレ。巨大なごみの島を発見して上陸するが、やがて起きた津波で台湾の東海岸に打ち上げられる。大学で文学を教えるアリスは、夫と小さな息子が山で行方不明になって以来、絶望の日々を送っていた。布農（ブヌン）族のレスキュー隊員ダフや、阿美（アミ）族のカフェ店主ハファイなど、それぞれに過去の傷を背負う隣人がアリスに寄り添うが、心は癒されない。そんな折、山道でアリスは怪我で動けなくなっているアトレを拾う——。「台湾は複層的な豊かさを持つ島で、古来、人々は自然と調和して生きていたが、都市化や経済発展と共にそれは忘れられた。美しい蝶の複眼のように、多元的な観点からもう一度私たちの島を見直したい」(著者)。英、仏など十数ヵ国語に翻訳。『自転車泥棒』の著者の代表的作品。

陳澄波密碼

『陳澄波を探して 消された台湾画家』(仮題)



著 柯宗明  
Ke Tsung-ming

訳 栖来ひかり

岩波書店  
2021年夏 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：远流出版

1984年、独裁政権下の台湾。ある晩、駆け出しの画家である阿政(あせい)の元を訪れたのは、古い絵の修復をねがう謎の依頼人だった。絵の作者さえ告げられずに困惑した阿政は、新聞記者でガールフレンドの方燕(ほうえん)と共に探索へと乗り出す。絵だけを手掛かりに芸術家への訪問を重ねるうち、作者は「陳澄波(ちんちようは)」と判明する。戦前、日本植民地下の台湾に生まれ東京で絵を学び、帝展にも入選した才能あふれる陳澄波。だが彼が死に至った経緯について誰もが口を閉ざす。次々と入れ替わる統治者のもとで抑圧を受け続けた台湾の人びとの哀しみを、悲劇の画家の生きざまに重ね、その死の謎を解き明かす。台湾近代絵画を代表する実在の画家・陳澄波の人生を紐解きながら、芸術とアイデンティティーをめぐって時をかける歴史ミステリー小説！

味道福爾摩莎『台湾の味わい』(仮題)



著 焦桐  
Jiao Tong

訳 川浩二

みすず書房  
2021年 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：二魚文化

担仔麵、葱抓餅、肉圓、蚵仔煎、肉臊飯、貢丸湯、豆花……。台湾を訪れる旅行者にとって大きな楽しみのひとつである「食」。親しみやすく美味なそれらの食べものは、台湾の土地の文化や歴史をおおいにその内に含みこんでいる。

本書は、詩人であり、長年にわたり台湾の飲食文化を探究してきた作家・焦桐によるエッセイ集。台湾に根づいた食べものを、その味わいや由来から紹介するのはもとより、「食」と離れがたく結びついた著者の家族との思い出や過去の記憶を重ねながら、滋味深い文章で綴る。読めば、台湾の食文化をうかがい知ることができるのはもちろん、そこに横溢する台湾ならではの情緒をも噛みしめることだろう。台湾飲食文学の代表作を日本語版独自の構成で刊行。50篇あまりを収録。挿画は陳妮均。



私家偵探  
『台北プライベートアイ』（仮題）



著 紀蔚然  
Chi Wei-Jan

訳 船山むつみ

文藝春秋  
2021年前半 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：印刻文學

台湾では交通信号の意味がほかの国とは違う。赤信号は「突っ込む準備をしろ」、緑は「そら、突っ込め」、黄色は「まだ突っ込まないのか、この馬鹿たれ！」という意味だ。台北の私立探偵が飲むのは、冷やしたマティーニでも、苦いウイスキーでもない。発泡スチロールのカップに入った出がらしの紅茶だ。

大学教授の地位を投げ出して、葬儀用品店街に私立探偵の看板を掲げた呉誠（ウーチョン）が会おうのは、事なかれ主義のぼっちゃり警官、政治を語り出すと止まらなくなる自動車修理工場の主人、仕事に自分の妻を尾行してしまうタクシー運転手など、一癖も二癖もあるやつばかり。浮気調査かと思われた美しい人妻からの依頼は意外な方向に発展し、探偵はいつのまにか、恐ろしい連続殺人事件に巻き込まれる。ユーモアと毒舌の炸裂する台湾ミステリー。

箸：怪談競演奇物語  
『箸 怪談競演ものがたり』（仮題）



著 三津田信三（日本）  
薛西斯（台湾）  
夜透紫（香港）  
瀟湘神（台湾）  
陳浩基（香港）

訳 玉田誠

光文社  
2021年夏 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：獨歩文化

とある高校の昼休み。女子高生は、転校生がご飯に竹の箸を突き立てて合掌し、「お箸さま」なる神に願をかけるのを見る。儀式は8つの手順からなり、84日間続ける。願いが通じれば遣いが報せにしてくれるが、決して「それ」に見つかってはいけない。（日本）  
痩せた少年の首に銀のチェーンで吊るされた珊瑚の箸。そこには唐の時代の神仙が宿っていた。（台湾）

水辺に死者のための食事を置く人びとは、憎い相手が、地獄で亡霊の花嫁の宴席に招待されるよう呪っているのだ。（香港）

日本、台湾、香港の鬼才作家が「箸」をテーマにリレー形式で競作。「本書は多国籍フュージョン料理。『タコのクリームポタージュ、西瓜添え』のようにヘンテコに思えるかもしれませんが、こんな独特な味わいがお好きな方もいらっしゃるかもしれません」——陳浩基

## 擂台旁邊『リングサイド』



著 林育徳  
Lin Yuh-Der

訳 三浦裕子

小学館  
2021年2月 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：麦田出版

安ホテルの受付バイトをする大学4年生（留年決定）の俺は、先輩からタイガーマスクの覆面をもらう。ホテルに「配達」される女の子のひとりが気に入り、意を決して彼女を呼ぶが、俺にできたのはマスクを被ったまま彼女と話すことだけだった。（「タイガーマスク」）

あの頃、親父は漁船に乗ってるし、お袋も家出して、家にはばあちゃんと俺、黒犬の来福の3人きりだった。俺たちは毎晩、日本プロレスの番組で三沢光晴を応援していた。だけど俺はある日、とんでもないことを知ってしまう。（「ばあちゃんのエメラルド」）

台湾ではマイナーな娯楽である「プロレス」をテーマにした10篇の連作短編集。花蓮（小説内では「小城」）を主な舞台に、市井の人びとの少しだけ特別な一日や、開発で変容していく街、故郷で何かを始める若者、原住民族の揺れるアイデンティティなどを描く。

## 妖怪台湾地図『妖怪台湾地図』（仮題）



文 何敬堯  
Ho Ching-yao

イラスト 小G瑋  
想方子工作室

原書房  
2021年 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：聯經出版

台湾にも独自の「妖怪」がいるのをご存じだろうか？本書は、台湾に妖怪ブームを巻き起こした作家兼妖怪研究家の何敬堯が、台湾全島の“あやかしスポット”を自ら巡り、紹介する作品。

魔神仔（モシナ）、虎姑婆（虎ばあさん）、林投姐（パンダナス樹の女幽霊）など、台湾ではおなじみの妖怪伝説に関係する場所や、地元民の間で長らく語り伝えられているローカル怪談奇談の現場などを、現地で撮影した豊富な写真や、人気イラストレーター小G瑋のイラストと共に紹介している。

著者が「本書の特徴は“旅行”と“研究”の融合である」と述べる通り、単なる観光地巡りには満足できなくなった台湾ディープトラベラーには、ちょっと変わったテーマ旅行の指南書としても有用だ。もちろん現地に行けなくても、読み物として十分楽しめる。

# 一個木匠和他的台灣博覽會 『台湾博覽會1935 スタンプコレクション』



著 陳柔縉  
Chen Rou-Jin

訳 中村加代子

東京堂出版  
2020年12月 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：麦田出版

舞台は1935年の台北。日本の台湾統治40周年を記念した「台湾博覽會」にあわせ、街の商店や旅館がこぞってオリジナルスタンプを作成。それを300個以上も集めたある収集家のノートが、80年後に発見された！ 独創性あふれるスタンプの数々は今なお色褪せず、少しも古さを感じさせない。

商店一軒一軒のエピソードを丹念に掘り起こした著者の手腕も光る。パチンコ台の置かれた人気食堂（ヒカル食堂）や、ウィンドウの裸婦像は猥褻か否か論争（盛進商行）、阪東妻三郎初のトーキーをかけた映画館（芳乃館）、窃盗事件の心温まる結末（新高旅館）、カフェの営業妨害をした男たちの目的（孔雀カフェ）、サルまで飼育していた郊外の温泉施設（衆樂園）などなど、読めば当時の空気が鮮やかによみがえり、人びとの暮らしが目の前に立ち上がる。

# 無家者『無家者』（仮題）



著 李玟萱  
Shine Lee

訳 橋本恭子

白水社  
2021年春 刊行予定

書影は原書のもの  
提供：游撃文化

行政システムなどの先進性が注目されている台湾だが、もちろん社会的課題が何ひとつないユートピアではない。日本と同様、またはそれ以上に経済的、社会的格差が拡大している。本書は台湾の街かどに生きる10人のホームレスと、彼らを援助する5人のケースワーカーにインタビューしたルポ。平凡な、あるいは波乱万丈な人生を送っていた彼らは、なぜ「家無き者」になったのか？ 台北有数の貧困地区、萬華でホームレス問題の解決に取り組む台湾芳草心慈善協会の企画のもと、20年来、社会的弱者へのサポートを続けてきた著名な作詞家・作家である著者が、被取材者ひとりひとりの物語を聞き出すと同時に、行政および民間による貧困支援のあるべき姿を伝える。2018年台北国際ブックフェア大賞ノンフィクション部門最優秀賞、2017年金鼎賞図書類個人賞図書編集賞受賞。





cover illustration

高妍 (Gao Yan / ガオ・イェン)

1996年台北生まれ。台湾芸術大学視覚伝達デザイン学系卒業。沖縄県立芸術大学絵画専攻に短期留学。台湾、日本でイラストレーションや漫画を中心に作品を発表している。村上春樹のエッセイ『猫を棄てる 父親について語るとき』(文藝春秋、2020年)のカバーイラストと挿絵を担当。現在は日本での漫画連載を制作中。

## TAIWAN BOOKS 台灣好書 vol.1

2020年11月発行

発行：台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

企画・編集・制作：太台本屋 tai-tai books  
<http://tai-tai-books.blog.jp/>

デザイン：横須賀拓

編集・執筆：及川茜、黄碧君、小島あつ子、栖来ひかり、  
 田中紀子、中村加代子、船山むつみ、松原理佳、三浦裕子、  
 三須祐介(五十音順)

配協協力：木内貴子

印刷：グラフィック

special thanks to

台湾の本を出してくださる日本の各出版社のみなさま  
 本小冊子を置いてくださる書店その他のスポットのみなさま

## 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

台湾文化センターは、台日文化交流のプラットフォームとして、台湾の芸術や文化関連を広く紹介しています。また、台湾の文化産業の発展や、日本マーケットへの進出・拡大を促進するため、台湾と日本の芸術・文化関係の各団体と協力し、企画展、イベント、情報提供など、広範囲の活動を行っています。いつでもお気軽にお越しください。

〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2階

TEL : 03-6206-6180

開館時間 月曜～金曜 10:00-17:00

FAX : 03-6206-6190

※土、日曜と祝祭日はイベント開催時のみ開館。

Email : twcc@mcc.gov.tw



最新情報はこちらでご確認ください  
<https://jp.taiwan.culture.tw/>

